

2007年度

新潟大学国際センター 年報

Annual Report
of Niigata University
International Exchange Support Center
2007



宮田 春夫

研究テーマ：環境と開発に関する南北関係

多様な主体が多様な役割を果たす複合的相互依存の国際社会において、環境と開発のための南北関係はどうあるべきか、全地球的レベルから地域共同体レベルまで、また、多国間協力、二国間協力を包括的に捉えて、政策のあり方を探っていきたいと考えています。

また、教育においては、理論と現実の両方を見ることにより、理論を現実に即して理解すること、また、対応を理論に基づきつつ現実に即したものとすることができる学生を育てたいと考えています。

所属学会：国際開発学会、環境科学会、International Studies Association

新潟大学ウェブサイトの研究者総覧のページ：

http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/public/MIYATAHaruo_a.html

1. 授業

「教養教育に関する科目」及び課題別副専攻「平和学」の授業のほか、農学部、理学部及び現代社会文化研究科の授業も担当しました。学部レベルで英語で開講している教養教育に関する科目は、短期交換留学プログラム科目としても重複指定しました。そのほかにも、課題別副専攻「平和学」及び「環境学」に指定されている科目があります。

課題別副専攻「平和学」の科目は、開発途上国の問題に強い関心を持つ学部生・大学院生のために始めた勉強会を正式な授業としたものです。2007年度は、「開発」とは何かを明確にしてノーベル賞を授与されたアマルティア・センの *Development as Freedom* を読む勉強会を「国際開発協力論：「開発」概念 II」とし授業に繰り入れました。他方で、春学期と秋学期それぞれに開講していた科目はどちらか一方の学期の開講として合理化を図りました。

授業内容や参考資料等を、下記6のウェブサイトに掲載し、学生の予習、復習、プレゼンテーション等に役立つようにしています。

本学における担当授業一覧

開講期	授業科目名	備考
春	Applied Research of International Relations: North-South Relations for the Environment and Development	教養教育に関する科目。短期交換留学生用開講科目、課題別副専攻「環境学」科目、課題別副専攻「平和学」科目としても指定。 環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。大学院レベルの内容を、学部生向けの評価方法にして開講。
	国際開発協力演習（環境と開発）	課題別副専攻「平和学」科目。 開発援助と環境の事例について、政府、非政府の援助関係者から直接話を聞く機会をも取り入れて、意図通りまたは真にそれを必要としている人に届く援助の難しさという現実を直視した上で、積極的に評価できる面を評価し、そうでない面についてはどのようにしたら改善できるのかを学生が考える機会を提供。

	国際開発協力論：「開発」概念 I	課題別副専攻「平和学」科目。 OECD 開発局の職員たちが書いた「開発」についての考え方の変遷を紹介した本（英語）を使い、どのようにして「開発」についての認識が深まっていったか、どのような背景の下に各々の開発理論が論じられたか、それぞれの開発理論がどのように開発援助等に影響したか等を論じた。
	自然環境関連法規	農学部。複数教員分担のうちの条約等に関する 2 コマ。
秋	Environmental Policy Study: History of Environmental Problems and Development of Policies in Japan	教養教育に関する科目。短期交換留学生用開講科目、課題別副専攻「環境学」科目としても指定。 明治から現在に至る日本の環境問題の歴史と政策の展開を見ながら、どのような環境問題の変化、社会の変化、国際関係により環境政策が変わって来たのかを論じる。
	国際開発協力論：「開発」概念 II	「改革派」とする考え方の流れを汲む Amartya Sen が「Development as Freedom」（英語原著）で整理した「開発」の幅広い概念を学ぶ。
	North-South Relations for the Environment and Development	現代社会文化研究科。 環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。
	環境政策論	理学部環境科学科専門科目。 明治から現在に至る日本の環境問題の歴史と政策の展開。背景の社会情勢等を詳しく論じる Environmental issues in Japan よりも政策課題を詳しく論じることに重点。
	異文化を考える：国際関係・国際協力の視点から	オムニバスの授業のうちの 1 コマを担当し、「相違と共通性：特に人類社会の中で」と題して、相違を理解した行動、世界の多様性、社会の生き残りの知恵の根源としての多様性、相違の特定の面だけが強調されて支配の手段になってきた歴史、共通点の認識の重要性等について論じた。（2007 年度限りの担当の予定。）
集中講義	開発途上国の環境と開発：事例研究	教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」指定科目。一種の集中講義として、9 月の 2 週間のマダガスカル現地調査を中心に開講。一つの開発途上国（今回はマダガスカル）を選択し、その国の環境問題、環境政策及び開発諸課題について事前に調査し、その上で、現地の問題の現場、政府機関、国際機関及び民間団体等を訪問して、実情を調査し、帰国後、それをそれぞれの学生が報告書にとりまとめ。 しかし、国際センター内の理解が得られず、実施できず。但し、別途学生の自主的取り組みとして実施。

なお、2007 年度には他大学の非常勤講師は行いませんでした。

2. 研究会

- (1) アジア経済研究所「アフリカ開発援助の新課題-第4回東京アフリカ開発会議（TICAD-4）への政策提言」研究会

2008年に日本で開かれるアフリカ開発会議及び主要国首脳会議に向けてアジア経済研究所が主宰した「アフリカ開発援助の新課題-第4回東京アフリカ開発会議（TICAD-4）への政策提言」研究会に委員として参加し、気候変動問題担当として、報告、関係研究者からの報告のアレンジ等を行いました。各回の研究会は公開で行われました。その成果は、吉田栄一（編）「アフリカ開発援助の新課題：アフリカ開発会議 TICAD IV と北海道洞爺湖サミット」（アジア経済研究所情勢分析レポート No. 10）中の「地球温暖化という開発課題と「人類の福祉」として、2008年4月に出版されました。

- (2) フィールド・スタディーに関する研究会

学生に開発途上国の現場の経験を、効果的かつ安全に得させることを重視しているため、引き続き、恵泉女学園大学等主宰の海外体験学習研究会に参加し、更なる安全対策、受け入れ側の事情の研究等の課題に取り組みました。

- (3) 学会活動

国際開発学会（会員）及び土木学会（非会員）の要請により、それぞれ1件、計2件の論文査読を行いました。

3. 社会貢献等

財務省によるアフリカの環境問題の取り組みへの支援等についての検討に参加しました。

4. 開発途上国との協力、開発途上国の実情等を知り、同じ人類社会の未来を共有していることを理解するための講演会等

開発途上国との協力、開発途上国の実情等を知り、同じ人類社会の未来を共有していることを理解するため、実際に協力に従事している方等から講演等して頂いて具体的な知識を得る会を、一部については課題別副専攻「平和学」の開講科目「国際開発協力演習（環境と開発）」と関連付けつつも、その科目の履修生以外にも開放し、また、特に意義があるものについては学外にも開放して企画・開催しています。多くの場合、テーマは、開発途上国との協力に関心を持っている学生たちの希望を考慮して選定しています。

- (1) 田中ちひろさん講演会「マダガスカル社会、自然、暮らし—青年海外協力隊活動の体験から—」

7月16日、「平和学」副専攻科目「国際開発協力演習（環境と開発）」一般開放講義兼国際開発研究会「アジアの国マダガスカル訪問・交流事業」（三菱銀行国際財団助成事業）勉強会として、この講演会を開催しました。田中さんは、2006年暮れまでマダガスカルに青年海外協力隊員（生態調査）として派遣され、アンタナナリボにある国立ツィンバザザ動物園を本拠にして、野生動物の調査等に従事されていました。帰国後は、仙台市営八木山動物園で、同動物園とツィンバザザ動物園との間の姉妹縁組み等を担当されています。

青年海外協力隊の活動事例として、また、マダガスカル社会や暮らしについて学生が学び、開発途上国やマダガスカルについて理解するとともに親近感を持ち、また、開発途上国への協力についての関心を高める機会としました。

学内の学生・教員のほかに、県内の青年海外協力隊経験者等も来て下さり、御自身の体

験の紹介等もして下さり、そのことで、開発途上国との協力の理解が更に深まりました。

(2) マダガスカル、インドネシア、キューバ：学生による海外訪問報告会

10月28日、夏休みにこれら開発途上3か国に行った学生たちの報告会を、農学部と合同で開催しました。第1部を「インドネシア、キューバ訪問報告会：有機農業を選択した背景と実情」（農学部）として、ボゴール農科大学、農民組合等を訪ねるとともに、農業実習、土壌調査、市場調査等を行い、更に、国際シンポジウムに参加した農学部のグループ及びキューバの都市農業を学ぼうと1人で訪問した同学部の学生からの報告、第2部を「アジアの国マダガスカル訪問・交流事業」報告会とし、上記1の教養科目「開発途上国の環境後開発：事例研究」に代えて学生たちのグループ「国際開発研究会」の自主的取り組みとして政府機関、NGO、大学、プロジェクト、青年海外協力隊員等を訪ね、現地の学生たちとの意見交換会を行った学生たちの報告会としました。更に、高校で長く生物学の教育等に従事された後、NHK文化センターの講師等多数の活動をされている藤田久さんも、夏に訪問したマダガスカルの生物多様性等について講演して下さいました。

(3) 青年海外協力隊募集説明会

学生の提案を受け、初めての試みとして、JICA、新潟県青年海外協力協会及び（社）青年海外協力協会と協力して、春と秋の青年海外協力隊員の募集説明会を学内で開催し、青年海外協力隊員として開発途上国で働くことに関心がある学生や、開発途上国に関心のある学生が、情報を得たり、学んだりする機会を提供しました。

(4) 新潟水俣病語り部の話を聞く会

国際協力そのものではありませんが、問題の現場や事実の確認を重視している立場から、新潟県立水俣病資料館「環境と人間のふれあい館」の「環境学習プラン」と「語り部口演会」を組み合わせ、私の授業の履修者等のうち希望する学生が同資料館において、水俣病被害者等の経験談を聞き、併せて同資料館を見学等する機会を設けています。これまでの参加者は、主に留学生及び環境専攻でない日本人学生（環境専攻の学生には、別途そのような機会があります。）で、水俣病が、健康及び経済面だけでなく地域社会の一体性の面でも大きな苦難を生じさせたことがよく理解できる機会になっています。

従来は年に2回実施していましたが、環境政策に関する授業を秋学期のみの開催としたこともあり、2007年度は12月の1回のみ実施しました。

5. 「国際開発研究会」による「アジアの国マダガスカル訪問・交流事業」

開発途上国と先進国との関係についての政策課題を効果的に理解させる上で、教室での授業や書籍による知識に加えて、開発途上国についての学生の具体的な理解が欠かせません。そこで、「百聞プラス一見」の考え方の下に、2005年度に引き続き、教養に関する科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」を開講し、2週間の日程で、主にマダガスカルにおいて農村、政府機関、国際機関、開発と保全のプロジェクト、NGO、国立公園まで幅広く訪問して、実情を見るとともに、関係者の説明を得る授業を行うことを計画しました。これは、同僚たちの同意が得られず、実現しませんでした。この授業を受けたかった学生を含め、開発途上国に強い関心を持ち、私の授業を履修してきた学生たちを中心に構成するグループ「国際開発研究会」が、財団法人三菱銀行国際財団の国際感覚ある将来の指導者作りのための助成を頂き、「アジアの国マダガスカル訪問・交流事業」の形で実現しました。

今回は、人事異動（内閣官房副長官相当職に御就任。）のために環境事務次官訪問はできませ

んでしたが、これまで通り、JICA、日本大使館、NGO、プロジェクト現場等の訪問に加え、大統領府の国家開発計画事務局長（その後10月の新内閣で経済・貿易・産業大臣に御就任。）が多忙な時間を割いてお会い下さいました。また、現地の学生たちとの意見交換会を行うとともに、国立アンタナナリボ大学を訪問し、日本の大学院で学位を取得された教員の方々にお会いしました。

この種の授業は、それほど多くの学生が参加できる訳ではないので、報告会を行い、より多くの学生他と経験を共有することを重視しています。そのため、10月に主に学内向け報告会を行うとともに、12月には新潟市国際交流協会の施設「クロスパルにいがた」で市民向け報告会を行いました。他方で、新潟県内で最も広く読まれている新潟日報に、学生代表が、この訪問・交流の結果を基に、「開発」と何かを論じた投稿を行いました。更に、2月には、国際協力機構（JICA）のタウンミーティングにいがたに出展しました。また、ウェブサイトを立て上げて、国外を含めた情報提供を行いました。また、学生の1人は、市場で値切り交渉してバナナを買った時の様子、青年海外協力隊員を訪問した時の様子、国立公園訪問、現地の学生との交流会の様子を切り取った「スタディーツアー イン マダガスカル」と題するビデオを制作し、ユーチューブに掲載しました。更に、学生たちは、自分たちでお金を出し合って、「開発途上国に行こう」という啓蒙リーフレットを作成しました。

マダガスカルは、地理的・経済的・政治的にはアフリカであるものの、インドネシアから移動していった人たちが初めて居住して社会の基層を形作っており、「アフリカに一番近いアジアの国」（山口洋一・元駐マダガスカル日本大使の著書の副題）と言われるように、大変アジア的な国です。新潟においては、ジョスラン・ラディフェラ駐日マダガスカル大使の御尽力もあり、2004年以来、同大使をお招きしてのシンポジウム、その機会に設立された市民レベルの新潟マダガスカル友の会による活動、2006年秋の同大使による県立中等教育学校での国際理解授業の実施と新潟大学での公開の特別講義、マダガスカル在住の女性を招いての同年春の新潟青稜大学でのマダガスカル講演会等が行われています。新潟は、そのような、マダガスカルと縁のできた数少ない県であり、私も、独立記念日、政府要人の訪日、大使新任の行事等に招かれています。

他方で、人類社会の共有意識を得る上では、比較的遠い場所であることに加え、開発途上国の開発問題について強い関心を持っている学生にとって、開発が遅れているとされる国の人々の状況を見ることが、とりわけ重要です。その点、マダガスカルは、世界銀行の2007年の報告では、「1日1ドル以下で生活」する人の割合が6割を超え、そのようなデータのある国の中では下から5番目の「貧困国」とされています。しかし、平均寿命、識字率、就学率、1人当たりGDPを用いてその国の人々が自分たちの生活を良くする力を総合的に示した国連開発計画の「人間開発指数」に関しては、2007年の報告において、マダガスカルは、下位ではなく、中位グループの中の下位の開発途上国になっています。そのように、お金で見ると最貧国、しかし、自分たちの生活を良くする力は比較的大きい国の実態を見ることが、より多くのことを学べるのです。

更に、実施に当たっては、上記のような駐日マダガスカル大使他の方々への御協力のお申し出も頂いていました。これは、的確に訪問先や交流相手を選定して効果的な訪問を実現する上で、非常に重要なことでした。また、事故等の万が一の場合にも、現地に協力者があることは、非常に心強いことです。更に、マダガスカルを訪問する日本人に限られているため、現地の日本大使館、JICA、元日本留学生他の日本に縁のあるの方々等との連絡も密接にできることも大きな強みです。

マダガスカル訪問日程：2007年9月7-21日

日（9月）	行動
7（金）	15:00 成田空港集合、成田発、バンコク着
8（土）	マダガスカル航空便のバンコク出発が18時間近く遅れたため、深夜にマダガスカルに到着。
9（日）	飲料水等の必需品の買い物。市内散策。市場も訪問。 アンドゥリアマンジャトゥ元郵政・通信大臣御夫妻御招待により父君（元国会議長）とともに同邸で夕食を頂く。
10（月）	日本大使館で安全対策等について助言を頂く。その後、新潟大学出身の宮村医務官に面会の予定であったが、御不幸のため急遽帰国され、面会は取りやめ。 JICA 事務所で、所長他から、日本の援助やマダガスカルの開発課題についてお聞きする。
11（火）	自然林保護や農民の生活向上のための事業を行う NGO の FANAMBY 訪問。ラジャウベリーナ専務理事から、従来の活動を拡大し、伝統米（赤米）とバニラのフェア・トレードを始めたこと等についてお聞きする。 アンタナナリボ大学訪問。一橋大学博士課程修了のラライナ・ラザフィアリスン教授を訪ねると、構内を案内して下さるとともに、京都大学で鳥類学を研究して学位を取得した教授、明治大学で経済学の学位を取得した教授、唯一の日本人学生等を紹介して下さった。 超多忙の中時間をとって下さったイヴ・ラザフィマヘファ大統領府国家開発計画事務総長を訪問。
12（水）	環境省管理下の特殊法人として国立公園他自然保護区の管理を行っているマダガスカル自然保護区管理協会（ANGAP）を訪問。 アンタナナリボ大学学生他との交換会。日本側からは、食糧自給率の低下、都市問題、自然環境等、日本が直面する諸課題についてパワーポイントを使って報告。
13（木）	アンジュズルベの先にある UNDP 担当の地球環境ファシリティー・プロジェクトを FANAMBY が実施している残存自然林保護と隣接農家の収入向上のプロジェクトプロジェクトを訪問。
14（金）	アンブヒチャンガヌ村の小学校に派遣されている青年海外協力隊員を訪問。 夕刻、アンダシベ・マンタディア国立公園に移動。
15（土）	施設やガイド等の管理システムがよく整備され、来訪者も多く、50%が地域の小規模開発に回される入園料収入、また外貨を稼いでいるアンダシベ・マンタディア国立公園（主にインドリ保護区）を訪問。人力車が多い等の特徴のある地方都市の例でもあるムラマンガの町に立ち寄った後、アンタナナリボに戻る。
16（日）	首都付近他の青年海外協力隊員5名と昼食をとりながら意見交換。 午後、ツィンバザザ動植物公園を訪問して、市民の日曜日の過ごし方等を見る。
17（月）	アンタナナリボ発、バンコク着
18（火）	FAO アジア・太平洋地域事務所訪問。小沼次長他から、FAO の活動に加え、国際機関で働くための条件、現場経験の重要性等もお聞きする。 午後、タマサート大学を訪問夕食は宮田の知人のタイ人とタイ料理。
19（水）	国連環境計画アジア・太平洋地域事務所訪問。次長が活動等について説明して下さる。また、カフェテリアでの昼食の後、国連ビル内を見学。その後、チャオブラヤ川に行き、上流のノンタブリまで定期船で往復して、町の成り立ち等を学ぶ。 夕食は、宮田の知人の別のタイ人とタイスキヤキ（しゃぶしゃぶ）。
20（木）	第2代タイ王朝の首都だった世界遺産アユタヤを見学。 夕食は UNEP 次長と、タイ人経営の和食レストランで。
21（金）	バンコク発、成田着。入国・税関手続き後解散



田中さん講演会の様子

首都アンタナナリボ



日曜日であり、建物内の店は閉まっていた。しかし、その前の路上の店にはぎわっていた。



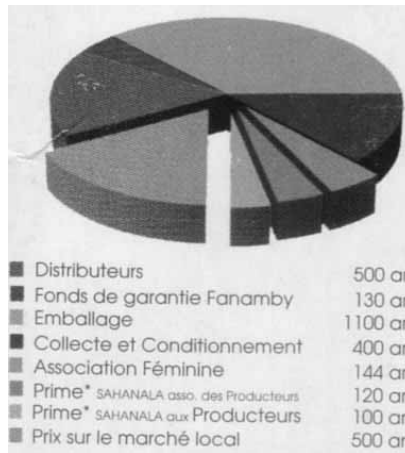
アンドゥリアマンジャトゥ元郵政・通信大臣（最後の女王のお孫さんでもある。）のお宅で。



JICA 事務所。所長自ら説明下さる。



NGO「FANAMBY」の売り出したアンジュルベ産の赤米の箱。
1箱 500グラム入り。



その箱に印刷されている売り上げ配分のグラフ

ar = アリアリ（マダガスカルの通貨。
1,000 アリアリが約 70 円）



アンタナナリボ大学理学部でライナ・ラザフィアリスン教授他と



ANGAP で。手にしているのは、国立公園の入園料収入の半分を地元の小規模開発に配分する方法が先進的であるとして愛知万博の際に受賞した「愛・地球賞」の賞状。



イヴハシナ・ラザフィマヘハ大統領府開発5か年計画事務局長と。なお、同事務局長は、10月27日に経済・貿易・産業大臣に就任。



学生等との意見交換会



最後まで後片付けをやっていたマダガスカルの学生たちと会場前で。

アンジュズルベの残存自然林保護プロジェクト訪問



残存自然林保護プロジェクトに接する農家では、訪れる度に、新しい作物、特に換金作物になり得るものの栽培を拡大させている。最初の年に案内して下さったこの農家の話を聞いた。手前はタピオカ。向こうに見える池も、まだ昨年から魚（ティラピア）の養殖を始めたものとのこと。インゲンの栽培等は、Fanamby のプロジェクトの一環として始めたが、魚の養殖を含め、他の工夫の多くは、独自に始めたものとのこと。インゲン、魚等は、アンジュズルベの町に行って、店や仲買人に卸すのではなく、自分で売っているとのこと。プロジェクトで始めたインゲンの栽培結果自体は良好とのことだが、出来高が気象条件等に大きく左右されることと、出来高が少ないことが課題と思うとのこと。



新たにパッションフルーツも植えられていた。その花。



一昨年、一帯の案内をして下さった農家の御主人



農家。



残存自然林とそれに接する農地。学生が農家の御主人に、生まれた頃と今とのこの付近の風景の違いを訪ねたところ、かつてはこれらの谷間は湿地であったが、自分が水田として開拓したことが大きく異なり、しかし、その周辺の自然林や、森林が無くなって草地になってしまっている風景はほとんど変わっていないとのこと。農業をやりたいと考えているこの学生が、農家の心構えについて更に訪ねたところ、「常に働き続けること。そうすることで初めて食べていくことができる。」との答えだった。家族数も増える中で、農地の拡大と作付けの工夫等の努力を重ねて初めて生活していけるというマダガスカルの農家の実態を反映していると思われた。

アンブヒチャンガヌ村の小学校に派遣されている青年海外協力隊員訪問



小学校の校舎（左）とトイレ。トイレは傷んでいる。また、生徒はほとんど使わないとのこと。



電気もない村である上、窓も大きくないので、暗い教室（この写真は明るく仕上げました。）。教室数が足りないので、2学年一緒に授業。急に地域の先生方の会議が入ったため、この日学校は臨時休校。



傷んだままのトイレの扉



環境教育のためのポスター。



教室で、協力隊員から説明して頂く。雨漏りのために天井がかなり傷んでいる。



生徒の家族によるボランティアの教室補修



学校の運営費がないので、協力隊員の音頭取りで、村の有志が、首都で売するための野菜を栽培。初代隊員がアスパラガスで始めた野菜の種類は、2代目隊員となり、かなり広がっていた。そのようなニンニクの植え付けに精を出している農家の方にお話を伺う。しかし、首都まで売りに行く交通費が工面できないため、これまでのところ隊員がホテル等に売りに行っている。



ちょうど隊員の住まいの水がなくなっていたので、みんなで水汲み体験をさせてもらった。水源から溝が掘られて、集落に比較的近いここまで水が引かれている。水は少し濁っている。村の人達はそれをそのまま飲んでいるとのこと。隊員には、JICA から浄水器が与えられている。村の女性は、頭に乘せた水から手を離し、片手に荷物、もう片方の腕で子供を抱くなどしているのが普通。隊員はまだ片手でバケツを支えながら歩く。



この村の人達は畑作に熱心に取り組んでいる。段々畑を作り、更に段のそれぞれに溝と水を貯める穴を掘って、少ない降水量に対処している。この畑作りは、他の集落に比べてかなり熱心。

村の方から頂いた昼食。たくさんのご飯（伝統の赤米）、イモ、野菜のスープ。隊員によれば、野菜のスープにたくさんの豆が入っている点、いつもよりも豪華とのこと。



青年海外協力隊員と昼食を取りながら意見交換。

重要な外貨収入をもたらし、また、入園料の半額を地元の小規模開発プロジェクトに配分しているアンダシベ・マンタディア国立公園のインドリ保護区を訪問



最大のキツネザルであるインドリ



インドリを見上げる。



首都への帰路に立ち寄ったムラマンガの市場の生地屋が集まっているところ。



マダガスカルの地方都市に多い人力車（「プスプス」と呼ばれる。）

後発開発途上国のマダガスカルとの比較のために帰路に立ち寄ったバンコク



FAO 訪問



国連ビルの中庭



国連ビル内で見かけた職員ポストの空席公告。今回は、専門機関の空席公告が多かった。



タマサート大学の学生食堂



タイボクシング部。外国人学生ばかりなので、タイ人学生はいないのかと聞くと、いるとのこと。この時は、タイ人学生は1人（女性）しかいなかったが。広島大学の相撲部員がほとんど留学生というのに似ている。日本人学生も5人入っていて、うち4人が女子学生とのこと。



数年前にできた高架式鉄道「スカイトレイン」。1997年の経済危機もあって、道路の深刻な渋滞が一時緩和したが、再び、渋滞は深刻になっていた。タマサート大学からの帰りも、我々のホテルの方向の渋滞を嫌うタクシーの運転手たちから次々と乗車拒否に遭い、ホテルにはバスを乗り継いで戻る結果になった。

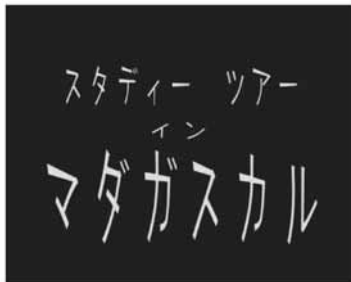


夜になっても渋滞するバンコクの通り

同行した中央大学の学生の制作したビデオ「スタディーツアー イン マダガスカル」
 (<http://jp.youtube.com/>で、「マダガスカル」、「開発」で検索すると出てきます。)

中央大学・武内貴之制作ビデオ

<http://jp.youtube.com/>から「マダガスカル」、「新潟大学」で検索して下さい。



開発途上国の現場を見ることの重要性を訴えようと、学生たちがお金を出し合って作った啓発リーフレット（両面）



学生たちのグループ「国際開発研究会」のウェブサイトの中の「アジアの国マダガスカル訪問・交流事業報告」のページ

<http://kokusaikaihatsuken.net/mada2007.aspx>

JICA ウェブサイトでの報告

http://www.jica.go.jp/hiroba/topics/2007/071017_02.html

6. その他

次のところにウェブサイト进行、授業についての詳細情報の提供等を行っています。

<http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~miyatah/>